

Title	非行少年の家族画の研究：相互作用性に着目した技法理解とその活用
Author(s)	藤掛, 明
Citation	2010 年度 博士論文
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3802
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2010年度

博士論文
(指導教員 郡司篤晃教授 平山正実教授)

非行少年の家族画の研究

相互作用性に着目した技法理解とその活用

藤掛 明

目次

I	はじめに	…	1
1.	本論文の背景	…	1
	(1) 80年代後半の家族療法（家族システム論）の台頭		
	(2) 家族画のブーム		
2.	家族画の本質的な課題	…	2
II	目的と方法		
1.	本論文の目的	…	3
2.	本論文の方法	…	4
III	構造と考察	…	4
1.	非行少年の家族画の基礎的分析	…	4
	(1) 論文：「非行少年の家族認知の分析 ―質問紙法及び描画法による類型化とその臨床像の検討」 (1990)		
2.	査定・診断的な相互作用性と非行少年の家族画	…	5
	(1) 論文：「描画臨床における相互作用性と治療」 (2002)		
	(2) 論文：「非行臨床における家族画の活用」 (2001)		
3.	治療的な相互作用性と非行少年の家族画	…	6
	(1) 論文：「描画臨床における相互作用性と治療」 (既出、2002)		
	(2) 論文：「家族画における介入的アプローチ ―1枚の家族画を前にして次に何を をするのか」 (1995)		
4.	非行臨床の独自性と家族画	…	7
	(1) 論文：「描画臨床における相互作用性と治療」 (既出、2002)		
5.	他のテストとの比較	…	8
	(1) 論文：「非行少年の家族関係をめぐって ―ソンディ法と描画法による取り組 み」 (1990)		
	(2) 論文：「コラージュ法」 (2002)		
6.	アジア諸国の非行少年の家族画	…	8
	(1) 論文：「タイ王国少年院在院者の家族認知について ―家族画による類型化と その臨床像の検討」 (1992)		
	(2) 論文：「大韓民国少年施設被収容者の家族画について」 (1993)		
7.	非行少年の家族画の解釈技術の実際と習得方法	…	9
	(1) 論文：「描画テストの技術習得にまつわる初学者の態度について ―描画講義 における質疑内容のパターン分析」 (1996)		
	(2) 論文：「描画解釈における着眼点のパターン分析」 (1996)		

IV 全体の考察	… 10
1. 家族画技法の理解～解釈視点	… 10
2. 査定・診断場面での相互作用性に着目した活用	… 12
3. 治療場面での相互作用性に着目した活用	… 14
4. 非行臨床の独自性と治療戦略	… 15
(1) 非行臨床の独自性	
(2) 非行描画の独自性	
(3) 治療戦略	
5. 家族画テストの道具としての普遍性、有用性	… 17
(1) 他テストとの比較において	
(2) 文化・民族性の異なる外国との比較において	
(3) 解釈技術の習得において、また実際の解釈方法において	
V 結論	… 19
VII 文献	… 19

別添付論文 1～10

(博士論文) 非行少年の家族画の研究

～相互作用性に着目した技法理解とその活用

I はじめに

1. 本論文の背景

(1) 80年代後半の家族療法(家族システム論)の台頭

非行と家族との関連について、これまで多くの研究が行われてきている。人の成長や資質形成への影響の大きさ、また現在の生活を支える構造上の影響の大きさを考えた場合、それは当然のことと言わねばならない。しかし、各研究の視点は必ずしも同一ではない。安香(1987)は、80年代後半の時点で、非行少年の家族研究は質的転換期に入っていると、家族の形態特徴を問題とする研究から、家族の機能特徴を解明する研究に移行しつつあることを指摘している。さらに、そうした機能研究の考え方の典型として、家族成員間の心理的相互作用を問題とする家族療法(家族システム論)の立場をあげている。

安香の指摘通り、その後、非行臨床において、この家族のシステムおよび機能を重視する立場から、臨床的、事例検討的な研究が輩出するようになる。生島(1993、1998、1999、2003)、団(1993)、村松(1988、1998、1999)、廣井(2001)、藤掛(2002)らにより、いずれも非行少年の所属する家族の有する、遊離性や纏綿性といった家族機能の特徴に注目する等して、具体的な家族援助法が実践、提唱された。

また、家族機能を扱った実証的、統計的な研究も現れ、福田(1991)は、Bloomの尺度を用いて、家族機能と非行少年の自立をめぐる行動との関連性を分析した。また、藤掛(1989、1990、2003)は、非行少年の家族関係を、家族機能の観点から因子分析を用いて類型化した。

(2) 家族画のブーム

このような80年代後半の家族研究の質的転換期において、家族を査定・診断する心理テストにも同様の転換がおとずれた。

それは、それまでの伝統的な描画テストと趣を異にする家族画テストが注目されるようになったことである。それは一種のブームの様相を呈した。

家族画とは、「あなたの家族を描きなさい」(FDT)、あるいは「”私の家族”という題で描きなさい」(家族画研究会方式)などの教示の下に描かれる家族を扱った描画テストを指す。また「家族が何かしているところを描きなさい」と家族の動きを付加する動

的家族画（KFD）も普及している（注1）。

当時、描画テストは、個人の深層心理を汲み取ることを主眼に使われていたが、現場の臨床家たちが、家族療法の台頭を背景に、クライアントの深層心理だけではなく、現実の家族との相互作用の様子を知りたいと願ったときに、既存の描画テストでは対応できなかった。そのために、家族関係を捉え得るとする家族画テストに注目したという事情があった。

日本における家族画研究の幕開けは、大阪少年鑑別所と浜松医科大学の関係者らによって始められた家族画研究会に求められる（石川、1986）。この研究会は、規模も大きく、（10年後に、日本描画テスト・描画療法学会となる）、研究会の母体として大阪少年鑑別所が当初から関与していたことから、家族画が非行臨床の世界にまたたくまに普及することになった。この家族画研究会から発信された80年代後半の非行少年の家族画論文（入江、1986、奥村1986、1987）は多くの非行実務家に影響を与え、それに呼応した非行実務家らの草創期の論文群がわずか数年で「家族画ガイドブック」（矯正協会、1989）としてまとめられるに至るのであった。

（注1）本論文では原則として、この動的家族画（KFD）を使用している。またテスト目的限定ではないことから、「家族画」という表記を行うことも多いが、「家族画テスト」と同義である。

2. 家族画の本質的な課題

これら家族療法の台頭や家族画ブームには、従来の伝統的、深層心理的解釈方法を否定する考え方も内包されており、描画解釈に混乱をもたらすことにもなった。それを一言でいえば、従来の、解釈者が描画作品の特徴を、客観的な解釈体系の知識を用いて解釈するという方法に対して、それを土台にしながらも最終的には描き手と解釈者の相互関係の中で解釈を決めていくべきものであるという解釈視点の転換を迫るものであった。

臨床の生きた営みを考えた場合には、この相互関係、相互作用性を軽視するわけにはいかない。しかし、描画の限界でもあるのだが、家族画が、個人で描くイメージであるが故に、そこから家族の客観的な（現実の）相互作用の姿を観察できるわけではない。あくまでも、現実の相互作用性を、描き手（非行少年）の家族イメージを通して類推するに過ぎないのである。非行実務家というなら、面接者が、いくら家族全体を想定して面接をし、家族画テストを実施しても、実際に面接で相対するのは非行少年個人であり、情報もその

個人のイメージ世界のものだということである。

その意味で、家族画テストが家族療法とタイアップしてもはやされたことは当時の幻想であったと言わねばならない。しかし、家族画テストがブームの時期を過ぎ、非行臨床の世界に定着するに及んで、家族療法の残した影響を再評価することができる。

それは、描画の臨床領域に、相互作用性を強調する家族療法の考え方が入ってきたことで、臨床のあらゆる場面で生じている相互作用性を再認識し、むしろ活用するという視点が与えられたことである。たとえ個人療法、個人面接であっても、面接者（解釈者）と非行少年（描き手）との間の相互作用性に、より鋭敏になり、その間で起きていることや、起こしていくべきことについて、注目し、研究していくことの重要性を再認識したのであった。

相互作用性の活用と従来からの客観性の確保。この2つの原理は、普通に考えるなら相対するものである。しかし、臨床の現場では、客観性の基盤を確保しながらも、どう相互作用性を活用し、どう更なる展開に進んでいくのかが問われており、今日の課題となっている。

II 目的と方法

1. 本論文の目的

上述した背景に鑑み、本論文では、非行少年の家族画テストについて、相互作用性に着目した技法理解と活用法を明らかにすることを目的とした。

具体的には、以下の7点について明らかにするものとした。

(1) 非行少年の家族画テストの基礎研究として、基本的な解釈類型を提示する。(2) 非行少年の家族画テストを査定、診断的に用いる際に、相互作用性に着目すると、どのような実施方法が可能となるのか。その実施方法(描画種目の選択)の体系を提示する。(3) 非行少年の家族画テストを治療に用いる際に、相互作用性に着目すると、どのような描画の取り扱いが可能となるのか。その実施方法(介入的アプローチ)について提示する。

また(4) 相互作用性を有効に活用する基盤として、非行臨床特有の、また非行描画臨床特有の査定上、治療上の原理について論じ、そのモデルを提示する。

また、(5) 非行少年の家族画テストを、他の関連テストと比較するとどのような特徴があるのかについても考察する。また(6) 国際的な比較としてタイ王国、大韓民国の非行少年の家族画と日本の非行少年の家族画とを比較し、日本の非行の家族画の特徴について

て考察する。

最後に、(7) 家族画テスト技術の習得方法や解釈方法について、その実態を明らかにし、学習者の資する視座を提供する。

2. 本論文の方法

本論文では、すでに発表した論文をまとめ(別添論文1～10)、それらを相互作用性に着目した技法理解と活用という観点から考察する。また、最後に全体の考察を行い、非行少年の家族画技法の新たな理解と活用法について論じる。

Ⅲ 構造と各考察

本論文は以下のような10の論文で構成する構造となっている。

1. 非行少年の家族画の基礎的分析

ここでは、非行少年の家族画テストの基礎的研究として、基本的な解釈類型を提示する。

(1) 論文:「非行少年の家族認知の分析 ―質問紙及び描画法による類型化とその臨床像の検討」(1990)【添付論文1】

掲載:この論文は、法務省研究科21回(自由課題)に応募し、選ばれた論文である。法務省矯正研修所に提出したほか、「矯正研修所紀要第5号」(83-89p、矯正研修所)に、家族画の分析の関係部分だけが掲載された。

主旨:この論文では、非行少年の家族関係を家族療法(家族システム論)の観点から分析することを意図し、前半では家族機能にまつわる質問紙による分析を、後半では家族画による分析を行った。家族画の分析では、非行少年の描いた家族画作品の諸特徴を変数として設定し、林の数量化Ⅲ類を用いてパターン分析を行い、4類型を得た。また、この家族画の各類型の典型例(各5事例、計20事例)を事例検討することで、類型の臨床像を明らかにした。

ここで得られた家族画類型は、家族療法(家族システム論)の観点から抽出・考察されたものであるため、家族全体としての情緒的結びつきや規制力など、家族機能の有り様を明らかにすることになった。

その後、この家族画類型は、従来の家族画類型が、客観的な家族認知像を査定しようとする(鷹村、1989、田中、1989)のに対して、描き手が自分の家族イメージと折り合おうとする適応努力の現れとして解釈することが可能であり、治療の手がかりにつながるもの

として位置づけられている（藤掛、2001）。

2. 査定・診断的な相互作用性と、非行少年の家族画

ここでは、非行少年の家族画テストを査定・診断的（注2）に用いる際に、相互作用性に着目すると、どのような実施方法が可能となるのか、その実施方法（描画種目の選択）の体系を提示した。

（1）論文：「描画臨床における相互作用性と治療」（2002）【添付論文2】

掲載：この論文は「家族描画法ハンドブック」（298-324p）矯正協会に掲載された。すでに1994年頃に執筆したものであるが、共著書籍であったため、発行は2002年となった。本項テーマ（査定・診断的な相互作用性と、非行少年の家族画）と対応するのは、論文中、Ⅱ章部分（302-309p）である。

主旨：この論文は、家族画を非行臨床場面で活用するための様々なトピックス、背景理論、各種技法を、「相互作用性」を鍵概念に総覧したもので、3本の論文を包括したものとも言える。そのうちⅡ章が本項テーマに対応している。

家族画も含め、描画をテストとして査定・診断目的で使う場合には、統一された教示を厳密に用いることが前提となっている。テストとしての客観性を確保するためである。

もちろん伝統的な実施方法にあっても、描画作品完成後に面接者が描き手に対して丹念に作品について質問をすることが奨励されている。そうして得た描き手の主観的な意味情報を解釈の参考にするのである。

これも大切な査定・診断場面での相互作用性の活用である（本添付文献Ⅰ章2を参照）。しかし、個々の描画完成後に限定せず、相互作用は働いているのであり、もう少し面接全体を俯瞰すれば、そもそも目の前にいるクライアントに、面接者がオーダーメイドで最もふさわしい描画種目（描画題目）を選ぶ行為こそ、相互作用性のもたらす大きな営みであると考えられる。通常、面接者は、自らの好みと学習により、特定の描画種目を固定した形で実施することが多いが、たとえ選択肢が僅かであっても、複数の描画種目をクライアントとの関係性のなかで選択していく作業を、自覚し、体系化することは重要な課題である。個々の描画テストに対する知識や経験があることが前提ではあるが、描き手（非行少年）の関心や面接の流れに即応したかたちで描画種目の選択や変形をあえて行うことについてここでは事例をもとに詳しく論じ、「教示の選択・変形」のスペクトラムを提示した（本添付論文中、図5）。

(2) 論文：「非行臨床における家族画の活用」(2001)【添付論文3】

掲載：この論文は「臨床精神医学 2001 年増刊号」(165-169p) アークメディアに掲載された。

主旨：この論文は、非行臨床における家族画の活用を、主として病院臨床や教育臨床との違いを明確にする観点から概説したものであるが、最終章で非行臨床における「家族画の変法」について独立して扱い、「間取図・見取図」、「縄跳び家族画」について説明した。

なお、「理想の間取図」「縄跳び家族画」ともに筆者の創案である(藤掛、1999)。

(注2) 従来使われていた「診断」という言葉には、医学的病名診断(diagnosis)のパラダイムに限定する用法もあることから、近年、より総合的な理解・把握を行う意味を明確にするために、査定あるいは心理的査定(assessment)という言葉を用いることが多くなってきた(米倉、1995)。本論文でも、そうした意図を明らかにするため、「査定・診断」と並列的な表記を採用した。

3. 治療的な相互作用性と、非行少年の家族画

ここでは、非行少年の家族画テストを治療に用いる際に、相互作用性に注目すると、新たにどのような描画の取り扱いが可能となるのか、その実施方法(介入的アプローチ)について提示した。

(1) 論文：「描画臨床における相互作用性と治療」(既出、2002)【添付論文2と同じ】

掲載：この論文は「家族描画法ハンドブック」(298-324p) 矯正協会に掲載された。本項テーマ(治療的な相互作用性と、非行少年の家族画)と対応するのは、論文中、Ⅲ章部分(310-317p)である。

主旨：この論文は、前項でも取り上げたものであるが、そのうちⅢ章が本項テーマに対応している。

本来、相互作用性は、治療的な作用に深く関連している。描画を描いてもらう行為自体にも、治療効果はある。また、面接者が意図的、治療的に描画イメージの特徴を指摘し、簡単な解釈を描き手にフィードバックすることもあり、その際にも治療効果が期待される。しかし、そうした言葉のやりとりにとどまらず、一旦完成された作品を前にして、新たに描き加えたり、作品自体をいくつかの部分に切り離して配列を変えたりしてもらうことによって、物理的な感覚も含め、描き手が固定化させている枠組みを再構築する新しい体験

に導き、大きな治療効果を得ることがある。こうした介入的な方法は、各面接ごとに、その相互作用性を最大限に感受しながら、描き手の特徴に応じて創造的、即興的に行われるものであり、その経緯と結果についても極めて相互作用的なものと言える。

従来の深層イメージを扱う伝統的な描画療法においては、描き手の傍らでの寡黙な鑑賞者であることが望ましいとされ、面接者としての露骨な影響力を排除する傾向にあったが、

相互作用性を最大限に活用する観点からは、面接者が治療的な意図でいかに介入し得るのかを扱った。これまで体系的に論じてこられなかっただけに、新しい分野と言える。

(2) 「家族画における介入的アプローチ - 1枚の家族画を前にして、次に何をするのか」 (1995) 【添付論文4】

掲載：この論文は「臨床描画研究 10号」(86-103p) 日本描画テスト描画療法学会に掲載された。

主旨：この論文は、上記論文「描画臨床における相互作用性と治療 III章」を発展させ、まとめたものであり、5事例を報告し、3つの介入方法についてまとめた。

4. 非行臨床の独自性と、家族画

ここでは、相互作用性を有効に活用する基盤として、非行臨床特有の、また非行描画臨床特有の査定上、治療上の原理について論じ、そのモデルを提示した。

(1) 論文：「描画臨床における相互作用性と治療」(既出、2002) 【添付論文2と同じ】

掲載：この論文は「家族描画法ハンドブック」(298-324p) 矯正協会に掲載された。本項テーマ(非行臨床の独自性と家族画)と対応するのは、論文中、IV章部分(317-324p)である。

主旨：この論文は、前項及び前々項でも取り上げたものであるが、そのうちIV章が本項テーマに対応している。

相互作用性を有効に活用するために、非行臨床特有の原理、非行の描画特有の原理について論じ、査定・診断上、治療上の戦略について明らかにした。相互作用性を反映させると、技法はきわめて個別的で創造的なものが入りこみ、その活用が恣意的になる危険性をはらんでいる。そのため大枠での原則や戦略を意識し、それに即した技法の活用が重要になってくると考えられた。

なお、本項テーマについては、当初日本犯罪心理学会シンポジウム(澤田ほか、1996、藤掛、1996)で発表したものであり、その後、単著書籍「非行カウンセリング入門」(2002、

金剛出版)としてまとめた。

5. 他のテストとの比較

ここでは、非行少年の家族画テストを、他の関連テストと比較するとどのような特徴があるのかについて考察している。

(1) 論文:「非行少年の家族関係をめぐってーソンディ法と描画法による取り組み」
(1990)【添付論文5】

掲載:この論文は「現代のエスプリ 273号」(194-201p)至文堂に掲載された。

主旨:この論文は、非行臨床におけるソンディ・テスト(注3)と家族画をバッテリー(組み合わせ)で用いることの有効性を報告したものである。その中で、先の家族画類型(添付論文1)とソンディテスト結果の相関関係を明らかにし、ソンディ理論を用いて家族画類型の意味するところを新たに解釈し、あわせて両技法の対照的な特質について述べた。

(2) 論文:「コラージュ法」(2002)【添付論文6】

掲載:この論文は「家族描画法ハンドブック」(172-192p)矯正協会に掲載された。

主旨:この論文は、非行臨床におけるコラージュ法(注4)の歴史、実施法、解釈法等を概観したものであるが、そのなかで、非行少年の家族イメージを扱ったコラージュ法と、家族画について、事例をもとに比較検討を行い、その違いについて論じている。

(注3)ソンディ・テストとは、48枚の顔写真の好悪選択により、被検者の深層心理を明らかにする投影法テストの一種である。ソンディ理論には家族の無意識を扱う考え方が含まれている。

(注4)コラージュ法とは、雑誌の切り抜きなどを自由に台紙に貼り付ける描画技法の一種である。治療を主眼とする場合には、コラージュ療法と呼ばれることが多い。

6. アジア諸国の非行少年の家族画

ここでは、国際的な比較としてタイ王国、大韓民国の非行少年の家族画と日本の非行少年の家族画とを比較し、各国の非行少年の家族画の特徴を考察した。日本の非行少年の家族画の特徴、また普遍性について考察する。確認した。

従来、日本の家族画の研究と臨床は、欧米の家族画テスト研究を輸入したものであり(石川、1986)、核家族化し、欧米化した現代日本の家族画臨床にあっては、解釈など特別な

差異がなく、その有用性が認められている。そこで家族関係に特徴があると言われ、かつ調査機会のあったアジア諸国の非行少年の家族画を、日本人の非行少年の家族画の分析とまったく同じ手法で分析することにより、その比較を行ったものである。

(1) 論文：「タイ王国少年院在院者の家族認知について ―家族画による類型化とその臨床像の検討」 (1992) 【添付論文7】

掲載：この論文は「中央研究所紀要第2号」(23-45p) 矯正協会中央研究所に掲載された。共著者は、奥村晋、石黒裕子。統計部分、考察部分ともに筆者が単独で担当し、脱稿したものを共著者にコメントを求めた。ただし、タイ王国の非行少年の家族画作品の収集については、当時中央研究所研究部長であった奥村晋が、タイにある国際連合事務所に手配し、協力者を募って行ったものである。

主旨：この論文は、先の家族画類型(添付論文1)の手法が、探索的で臨床的な特徴があったことから、文化差のある他国民の家族画の研究にも適応できると考え、行ったものである。またその論文の中で、タイ王国の非行少年の家族画と日本の非行少年の家族画の比較も行い、両国に共通する家族画や、後者の家族画の独自の特徴を明らかにした。

(2) 論文：「大韓民国少年施設被収容者の家族画について」 (1993) 【添付論文8】

掲載：この論文は「中央研究所紀要第3号」(99-112p) 矯正協会中央研究所に掲載された。共著者は、佐藤和夫、奥村晋、鷹村アヤ子、石黒裕子。統計部分、考察部分ともに筆者が単独で担当し、脱稿したものを共著者にコメントを求めた。ただし、大韓民国の非行少年の家族画作品の収集については、当時中央研究所研究部長であった奥村晋が、韓国政府に手配し、行ったものである。

主旨：この論文は、先の家族画類型(添付論文1)の手法が、探索的で臨床的な特徴があったことから、文化差のある他国民の家族画の研究にも適応できると考え、最初にタイ王国の非行少年の家族画に対して行った(添付論文7)ものに次ぐ第二弾として行ったものである。結果的に、大韓民国の非行少年の家族画に対する日本の非行少年の家族画の共通点および特徴も明らかになった。

7. 非行少年の家族画の解釈技術の実際と習得方法

ここでは、家族画テスト技術の習得方法や解釈方法について、その実態を明らかにし、学習者の資する視座を提供した。

(1) 論文：「描画テストの技術習得にまつわる初学者の態度について ―描画講義にお

ける質疑内容のパターン分析」 (1996) 【添付論文 9】

掲載：この論文は、笠井達夫退官記念寄稿論文集 (16-27p) に掲載された。共著者は、鷹村アヤ子。資料収集、統計、考察部分ともに筆者が単独で担当し、脱稿したものを共著者にコメントを求めた。

主旨：この論文は、描画初学者の技術習得の道筋を明らかにすることを目的に行ったものである。描画テストの初学者から、学習上の質問を徴収し、その質問内容を変数とし、林の数量化Ⅲ類によりパターン分析を行い、初学者の5つの態度類型を得た。また各類型の典型例に該当する者に、インタビューを行い、その類型の肉付けを行った。

(2) 論文：「描画解釈における着眼点のパターン分析」 (1996) 【添付論文 10】

掲載：この論文は「臨床描画研究 11 号」 (122-139p) 日本描画テスト・描画療法学会に掲載された。

主旨：この論文は、実際の家族画作品を前にしたときに、熟達した解釈者はどのような手順、着眼点で解釈をしていくのかを明らかにすることを目的にしたものである。日本描画テスト・描画療法学会員 67 名の協力のもと、家族画テストの目隠し分析を行い、その際に配布したアンケートの回答を変数とし、林の数量化Ⅲ類により、5つの解釈上の着眼点を得た。

IV 全体の考察

ここでは、非行少年の家族画について、相互作用性に着目した技法のあり方について、総合考察を行った。

1. 家族画技法の理解～解釈視点

家族をひとつのシステムとみなす家族療法では、精神分析のように過去の原因をさかのぼって解釈することに主眼を置かず、「今ここ」での関係性、相互作用性を重視する。また、事実に対して当該者が与えている意味づけを変え、異なる見方でとらえ直すことが治療的観点から奨励される。

描画についても、石川 (1986) が言うように、面接者と描き手の間の相互作用の中で描画の解釈を見いだしていく作業が治療であるとするなら、家族画の解釈にあたっては、客観的な家族の認知像として、否定的な描画サインと解釈情報を中心に据えるのではなく、そのなかから肯定的な要素、適応的な要素を積極的に引き出し、描き手の中にある家族と折り合おうとする姿勢を様々な次元で再解釈することが治療上重要となる。

添付論文1において、非行少年の家族画の基礎的分析として、その類型化の作業を行い、その類型に該当する非行少年の臨床像を明らかにした。すなわち、①屋外レジャーの家族画、②日常の見下ろし家族画、③非同一の家族画、④特定人物のみの家族画の4類型である(注5)。

①の屋外レジャーの家族画というのは、家族が屋外で、旅行など非日常の活動をしている描画である。典型例では、家族は小サイズで描かれる。描き手は、昔の楽しかった家族の旅行などの思い出を意図して描いたものである。

②日常の見下ろしの家族画というのは、上から見下ろしたり、あるいは遠まきに見た、食事などの家族の日常の活動をしている描画である。典型例では鳥瞰図となり、家族は頭だけが描かれることも多い。

この2つの類型を比較すると、①の屋外レジャー画は、過去を描き、「いま」を描かない。いわば時間というクッションを置いている。一方で②の見下ろし画は、「間近なここで」を描かず、距離という空間上のクッションを置いている。実際の臨床像から見ると、「いま」の欠落した屋外レジャー画を描く人の実際の家族は、保護機能がそれほど崩れていない場合が多く、思春期以降急速に少年(描き手)が家族に反発を強めているケースが多い。一方、「間近なここで」が欠落した見下ろし画では、情緒的に不安定な家族に育ち、家族にとけこみきれていない場合が多い。この両群の違いは、屋外レジャー画の事例の方には、家族の規制力が存在しており、見下ろし画の方にはそうした規制力が存在するものの、非常に不安定になっている点である。そのため、前者には反発が、後者には付かず離れずの葛藤が見てとれる。

③非同一の家族画というのは、家族員が同じ課題で動いておらず、それぞれに描かれている描画である。日常場面が描かれることが多く、顔が空白になる(目や口がない)ことがままある。家族の相互交流が希薄であり、家族に関わることに對してとまどいがみられる。

④特定人物のみの家族画というのは、家族全員を描かず、特定人物のみを描く描画である。多くに場合、描かれた人物に動きがない。良くも悪くも描き手にとって関心の高い人物が描かれるのであるが、家族間のかかわりを表現すること自体を回避しており、ある種深刻な葛藤の存在が汲み取れる。

これら4つの類型に沿って、家族イメージの表出の仕方をみると、①や②では、時間や空間のクッションを用意して適応を図っていると考えられる。クッションを置いたからこ

そ、楽しい家族や日常の家族を、家族イメージとして思い浮かべられ、折り合うことが可能になっているのである。ところが、家族関係の葛藤がさらに強い場合には、そうしたクッションでは太刀打ちできなくなる。するとクッションのままに、日常の一体感のない家族イメージをそのまま表出するようになる。しかし、この場合でも、「家族が一緒にかかわらない」というクッションを置いたともいえ、家族全体を意識することには成功しており、また適応への構えを感じとることができる。それでも太刀打ちできなくなると、今度は家族像自体を十分に作れなくなる。家族の特定人物を描くような場合には、全体としての家族イメージが成立させられず、混乱していることが多い。しかしこれとて、何らかの（不完全であっても）家族イメージを描こうとしており、必死にその接点を探しているのである。

このように、それぞれの類型において、一見否定的な家族イメージであっても、描き手からすればそれ以上否定的、絶望的にならなくてすむように、ぎりぎりのところで折り合おうとする姿勢を見せているものとして解釈できるのである。

非行少年の家族画の解釈視点として、こうした適応努力としての姿を見て取ることは重要なことであると考えられる。後にも述べるが、家族画が、意識的・現実的な要素を多く含む描画技法であるだけに、社会的で相互作用的な意味づけがしやすく、このような折り合いの姿勢を扱うことを解釈の視点とすることは非常に重要であると考ええる。

（注5）添付論文1では、類型の番号を数量化Ⅲ類で抽出した軸の番号で記載したが、本論文では、その類型の意味内容を鑑み、健康度の高い順に、便宜上番号を付け直した。

2. 査定・診断場面での相互作用性に着目した活用

描画場面における相互作用性といった場合、本来治療的な活用を想定している。しかし、査定・診断的な活用においても、この相互作用性を十分に考慮する必要がある。

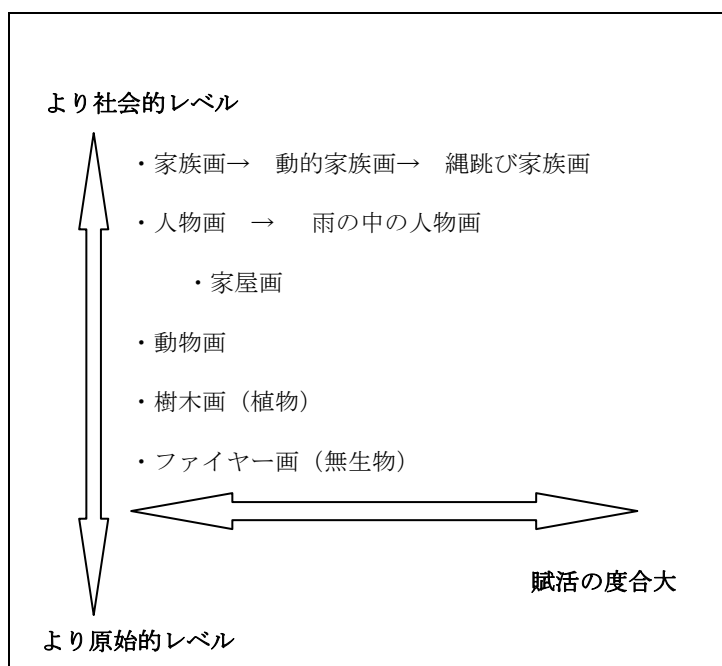
査定・診断場面で相互作用性を活用する場合、一般には、高橋（1986）や宇都宮（2002）が言うように「描画後の質問もしくは話し合い」によって描画情報を多く収集することを意味している。また小栗（2002）が取り上げているように、必要に応じて、描画終了後に面接者が家族画解釈の結果を描き手に伝えることもある。

しかし、これまで添付論文2、3で扱ってきたように、査定・診断場面での相互作用に着目すると、その最大の活用は、あらかじめ面接者として、どのような教示（描画種目）

を描き手に与えるのか、あるいはどのような変法にして与えるのかを、面接の狙いや流れと、対象者（描き手）の関心や個性に即して決めていくことにある。

この描画種目の選択や変形については、添付論文2で提示したスペクトラム（添付論文中、図5）により表される。

■図：「教示の選択・変形」（添付論文2からの再掲）



図の上下で表したのは、「社会的レベルー原始的レベル」の軸である。中程にある「人物画」を基準にするなら、種目が上になる（例：「家族画」）と社会的・文化的要素が強まり、映し出される情報は、人格のより表層部のもの（態度、価値観など）を表す。この場合、描き手の抵抗感や防衛はそれにつれ強まる。解釈においては常識的な要素が増す。

逆に、下になる（例：「樹木画」）と社会的・文化的要素が弱まり、情報は人格のより基底部（深層心理、基本的な性格傾向など）になり、描く際の抵抗は弱まる。解釈においては象徴的な要素が増す。

また図の左右で表したのは、「賦活の小ー大」の軸である。一般的な教示になんらかの賦活（制約、条件）を与えることで、右にシフトしていく。左のほうが、広く包括的に情報を得られるが、右にシフトすると、狭い範囲に限られるが、賦活意図に即した深い情報を得られる。左が「広く浅く」、右が「狭く深く」といった具合である。家族画で言えば、通常の家族画が左に位置し、「動的家族画」はその右にシフトすることになり、「縄跳び

家族画」はさらに右にシフトすることになる。得られる情報も、家族認知全般から、動的な家族関係の認知に、さらには家族連合関係にまつわる認知情報に特化されていく。

無限と言っているほどの描画種目があり、家族画に限っても多種多彩な教示と変法が存在する。査定・診断的な意味で、相互作用性を活用するという意味で、このような教示のレベル（上下）、教示の賦活（「左右」）の軸を意識しておくことが大切である。

3. 治療場面での相互作用性に着目した活用

およそすべての描画療法では、面接者と描き手の間で相互作用性が活発に働いている。一般に治療場面での相互作用性を取り上げる際には、描き手が家族画を描くことにより、治療やカウンセリングをより深めることにつながったり、治療効果の測定が行えることを取り上げる（遠藤、1989）。

しかし、相互作用性を最大限に引き出し、さらなる相互作用的な介入を行う方法として、添付論文2、4で取り上げた、介入的アプローチがある。

これは、通常の描画療法なら、治療者が内に納めている心づもりを、言葉でなく、新しい作業や課題として創出することで、描き手にフィードバックしようとすることである。深層イメージというよりは、意識上の体験として変化を迫っていくものである。この方法は自我が脆弱でなく、行動化に向かいやすい対象者を扱う非行臨床では、非常に有効な方法になり得ると考えられる。

本来その即興性に特色があるのであるから、類型的、体系的な記述はなじまないのであるが、あえて挙げると、次のような3つの方法が考えられる。

第一に、「新しい用紙に描き直す」あるいは「同一画面に新たに書き加える」という描画行為を導入することである。このことで、描き手に、自分は再出発できるのだ、やり直せるのだという感覚を味わうことを促す。また硬直した視点を変えることで、様々な洞察を促すことになる。

第二に、「裏返す」「切り離す」「並べ替える」という描画行為を導入することである。これらも、強烈な体験をもたらす。台紙を裏返し裏面を表にする行為には、自分の内面に目を向ける感覚を、切り離す行為には、これまでしがみついていた対象から一旦離れてみる感覚を描き手に促す。画面（あるいはその一部）を並べ変える行為には、自分が移動し、再構成できる存在である感覚を促すことになる。

第三に、複数の描画作品をまとめたり、新たな意味づけを加えることで、アルバムや作

品集、卒業記念品、~~や~~お守りなど、特別な物にしていくことである。この場合、創り上げる行為自体がメタフォリックな価値を持つが、そればかりでなく創り上げたものを継続して保存したり、鑑賞したり、使用したりすることで、体験を持続的に味わうことができるのである。

このように、介入的方法は、多彩に展開できるが、相互の関わりの中で創り上げていく性質が強く、パターン化し、介入の当意即妙さがなくなると、治療的な作用が弱まってしまふ。面接者も、描き手側に身を置き、描画行為の中で生起している様々な体験に敏感である必要がある。

4. 非行臨床の独自性と治療戦略

添付論文2のIV章で指摘していることと重なるが、非行臨床の独自性、そして同じ文脈で非行の描画臨床の独自性を考察することは、査定・診断および治療双方の基盤となるものであり、相互作用性という柔軟で多彩な営みにあつて、家族画の治療的戦略の方向性を得るためには非常に重要な事柄である。

(1) 非行臨床の独自性

一般に、思春期・青年期の問題行動には、自分の殻に閉じこもる非社会的なものと、行動化し逸脱していく反社会的なものに分けて考えられている。非行はまさに後者の代表的なものである。

そもそも非行行為は、適応努力の一種としての性質を持ち、過重なストレス下に、背伸び・やせ我慢をし、行動化していく果てに生じるものと考えられる。無理を重ねて、強行突破を続けるとき、人は心理的な息切れ状態に陥るが、そこでそうした自分の状態を認めて立ち止まれないと、様々な問題が生じるのである。

もっとも立ち止まれない、極端な背伸び・やせ我慢の生き方の背後には、自分の無力感や疎外感をやみくもに否定しようとする心理機制が働いている。だから背伸びを止めて、自分の弱さを認め、弱音を吐くことは、無力で寂しい自分を直視せねばならず、当人からすると恐ろしく辛い作業になる。一度認めてしまうと、へたり込んでしまいそうで頑張る元気も出てこないし、これまでのすべてが壊れてしまうような感覚があるのである。

これはけっして意識上の葛藤でもなく、無意識の抑圧でもない。いわば前意識上の感情の処理である。非行少年本人は、必死に無力感や疎外感を否定しようともがいており、少しでもその否定のやりくりが崩れると、激しい自己直面化の嵐に遭うことになる。

そのようにして立ち止まれず、自分の無力感や疎外感を否定するために、様々な方向に行動化していくのであるが、そのあり方は非行少年ごとに異なる。無力感や疎外感の程度、またその否定の強弱、そしてそれを埋め合わせるもの（代償行為）への親和性などにより、多種多様に行動化される。総じて、不良交遊や粗暴非行、暴走族などはみな背伸びの末、最後に、惨めで無力な自分を認めまいとして、必死に幻想的な自己拡大感を味わおうとしている姿なのである。

（２）非行描画の独自性

非行少年の生き方を「背伸び・やせ我慢」型と考えると、非行少年の描画もまた同じ文脈で捉えることができる。事物は大きなサイズで描かれることが多く、力強く、時に乱雑に線が引かれる。そこには、外界からの圧力にへこたれず、必死で耐え、むしろ向きになって自分を強く見せようとする姿がある。まさしく「背伸び・やせ我慢」型といえる姿が画面上にも現れるのである。

家族画も事情は同じである。深刻な家族葛藤がありながらも、非行少年は実に懸命に家族の絵を描いてくれる。それも願望像を含めながら、添付論文1でも触れたことであるが、自分が折り合えるぎりぎりのイメージで描いてくれる。非行の一般描画が背伸びをした自己像を表現しているように、家族画もまた、無理をしながら、家族に折り合おうとしている描き手の姿を表現していると考えられるのである。

（３）治療戦略

非行少年の生き方を「背伸び・やせ我慢」型とし、その描画もまた「背伸び・やせ我慢」型の文脈で受けとめることができると考えると、描画テストでは、描き手がどのような背伸び・強行突破の傾向があるのかが最大のポイントとなる。外界や状況にどのようにかわり、どのように自己を捉えているのか、それも撤退したり、弱音を吐かずに、どのくらい硬直に頑張ろうとしているのかを見るのである。

また、非行の描画療法では、そうした背伸びを生き方をイメージの中でどのように描き手自身が自覚、洞察し、受けとめようとしているのかの流れを見ることが最大のポイントとなる。華やかで景気の良いイメージが描き出されても、それは従来からの背伸び・強行突破の生き方の反映にすぎない場合が多い。自己直面化し、「背伸びややせ我慢をせずに、自分なりにやっていくしかない」と良い意味で開き直れるようなプロセスを経て、はじめて非行から離れる生き方に変化したと言えるのである。

特に介入的アプローチの場合、息切れを抱えながら動き続ける非行少年たちに対して、

絵のもつイメージを共に見つけ、意味づけていく作業を通して、その背伸びの生き方を和らげていくように働きかけていくことが重要になる。たとえば描き手の硬直した認知フレームを揺さぶり、背伸びややせ我慢を止めて立ち止まり、弱音を吐いてもかまわないのだという新しい意味づけを個々の描画の中で与えたり、面接者として助言の根拠に絵を使うことができるのである。

5. 家族画テストの道具としての普遍性、有用性

家族画テストを実施するにあたって、相互作用性を積極的に活用していくあり方を明らかにすることが本論文の目的であるが、同時に技法として共有されていくためには、そこに客観的、普遍的な要素を確保せねばならない。相互作用性を最大限に活用するためには、面接者が、恣意的で自己満足的な使用に陥らぬよう、技法としての客観的な有用性を確認することが不可欠である。本項では、家族画に（１）他のテストとの比較において、テストとしてどのような特徴があるのか、（２）文化・民族性の異なる外国との比較において、テストとしての普遍性があるのか、（３）解釈技術の習得において、また実際の解釈方法において、テストとしての定則性があるのか、についてそれぞれに扱う。

（１）他テストとの比較において

添付論文5, 6に見るように、家族イメージを探るためのテストとして、家族画は、ソンディ・テストと組み合わせても、またコラージュ法と組み合わせても、他テストとは異なった特徴を発揮し、補い合う関係にある。家族画テストの側から見れば、他テストとの所見が家族画テストの所見と矛盾せず、それに調和し、肉付けするものであったことから、家族画テストの解釈妥当性を確保しているといえることができる。

なお、河合（1984）は、テストとして、クライアントの人格の全体像をつかむものと、クライアントのいま直面していることがらをピンポイントで見ることができるものがあるとし、この対照的な2種類のテストを組み合わせる有効性を指摘している。これにしたがえば、ソンディ・テストは、ソンディ理論に基づき、人格・家族関係情報全体をつかめ、家族画テストはそれに比べれば格段に恒常性ではなく瞬時的な情報である。また家族画テストと同じ描画法であるコラージュ法と対比させると、家族画テストのほうが、コラージュ法のように意図を統合せぬままに表現することがないため、より恒常的な情報と考えられる。このような観点からの対比は、家族イメージを扱うテストとして、家族画、ソンディ・テスト、コラージュ法の3種目が三者三様の異なった位置におり、この3種目を取り

上げる妥当性や、先の組み合わせの有効性を支持するものと考えられる。

(2) 文化・民族性の異なる外国との比較において

描画は、民族や国の違いの影響を何らかのかたちで受けると言われている。荻野(1982)は、比較文化人類学的な観点で、自ら諸外国の住民に、HTP描画法(家・樹・人物を描いてもらう描画)を描いてもらった経験から、留意点とし常にその文化状況を念頭に置く必要を挙げている。その上で、部分的な差異はあるものの総じて「あらゆる文化圏や社会のなかに生きている人たち」に対して実施することが可能だとしている。

このことは添付論文7, 8にみるように家族画テストにも当てはまるものと考えられる。添付論文1で提示した日本の非行少年の家族画類型を基に、同じ手法で抽出したタイ王国、大韓民国の類型とを比較すると、両国男女計4群について、その大半は、おおむね類似の類型、あるいは特定の類型と対応関係のあることが推察された。また各国の非行少年の家族画の特徴を指摘できたのも、その前提として、共通する描画特徴が多くあったことにはほかならない。このように、家族画テストには、文化や民族性を越えた一定の普遍性があると考えられる。

(3) 解釈技術の習得において、また実際の解釈方法において

家族画テストが技法として成立するためには、解釈技術の習得についても、また実際の解釈方法についても、いわゆる職人芸的な経験知ではなく、テスト技法としての定則性を確保する必要があるが、添付論文9, 10を通して一定の定則性を確認できたと考える。

描画解釈技術の取得について、添付論文9では、初学者の態度の類型化を行い、5つの類型を得ている。それぞれの類型ごとに、描画の初学者の技術習得の道筋を明らかにした。また類型化にあたっては、志向(診断志向、治療志向)について注目したが、これは、相互作用性を軽視するか(診断志向)、重視するか(治療志向)といった軸として置き換えることが可能であり、結果的に描画学習者の教育にあたって、指導者が相互作用性の観点から指導や助言を行う際の視座を提供するものと考えられる。

実際の解釈方法については、添付論文10で、5つの解釈上の着眼点を明らかにし、熟達した解釈者の解釈プロセスを指摘した。描出された家族像が、描き手の現実像なのか、理想像なのか、という大きなテーマについて、熟達者はあえて理想像と深読みすることがあり、その判断が特に問われることなど、職人芸的な解釈技術の内実を明らかにすることができた。

このように、本来、客観的に捉えにくい描画解釈やその技術取得について、それぞれに

その類型を抽出できたことで、その定則性の一端が明らかになったものとする。

V 結論

過去の論文において、提示した事例と統計分析を見ながら、相互作用性の観点から、家族画技法の理解と活用について述べた。言葉を変えれば、本来査定・診断的であり、固定的に実施する家族画テストを、刻々と変化していく臨床場面の相互作用性の中で、いかに査定的に活用できるのか、そしていかに治療的に活用できるかということを書いたとも書ける。

結論としては、従来の相互作用性の活用をさらに進め、査定的には「教示の選択・変形」にまで及ぶべきこと、そして、治療的には「介入的なアプローチ」にまで及ぶことを示した。

そして、その基盤になるものとして、非行臨床の独自性、非行の描画臨床の独自性を面接者が意識し、その上で、家族画という技法を戦略的に活用していくことが重要であると考えた。

また、家族画技法を支える道具としての客観的な有用性（テストとしての独自性、文化・民族差を越えた普遍性、解釈技術およびその習得の定則性）についても確認し、技法として共有され得るものとした。

なお、本研究は、相互作用性に注目することによって、従来の非行少年の家族画では、あまり指摘されてこなかった視点や体系を導きだし、実際の活用に供することを旨としたところに意義があるとする。

VI 文献

- 安香宏（1987）非行と家族、家族の人間関係Ⅱ各論 67-90p ブレーン出版
- 団士郎（1993）非行と家族療法、ミネルヴァ書房
- 遠藤辰雄（1989）事例編解説、家族画ガイドブック 159-161p、矯正協会
- 藤掛明（1989）非行少年の家族機能の分析（1）、犯罪心理学研究 27-特 110-111p
日本犯罪心理学会
- 同（1990）非行少年の家族機能の分析（2）、犯罪心理学研究 28-特 112-113p、
日本犯罪心理学会
- 同（1996）心理テストとやせ我慢、犯罪心理学研究 34-特 158-159p、日本犯罪心

理学会

- 同 (1999) 描画テスト・描画療法入門、金剛出版
- 同 (2001) 非行臨床における家族画の活用、臨床精神医学増刊号 165-169p、アー
クメディア
- 同 (2002) 非行カウンセリング入門、金剛出版
- 同 (2003) 非行と家族機能との関連について、聖学院大学総合研究所 27 号
295-322p
- 福田順一 (1991) 家族機能と非行少年の自立との関連、犯罪心理学研究 29-1 19-36p、
日本犯罪心理学会
- 廣井亮一 (2001) 非行少年～家裁調査官のケースファイル、宝島社
- 石川元 (1986) 家族画 (FDT, DAF) と合同動的家族画 (CKFD)、臨床描画
研究 1 105-129p、家族画研究会
- 河合隼雄ほか (1984) トポスの知 118-124p、TBSブリタニカ
- 村松励 (1988) 非行臨床における「家族」への援助過程、犯罪心理学研究 26-特 52-53p、
日本犯罪心理学会
- 同 (1998) 非行臨床の課題、非行臨床の実践 15-27p、金剛出版
- 同 (1999) 薬物非行、少年非行の世界 127-154p、有斐閣
- 荻野恒一 (1982) 創造的営みとしてのHTP法、HTP診断法 i-vi、新曜社
- 小栗正幸 (2002) 家族描画法解釈の基礎、家族描画法ハンドブック 19-52p、矯正協会
- 澤田豊ほか (1996) 犯罪臨床における「やせ我慢」という視点、犯罪心理学研究 34-
特 152-159p、日本犯罪心理学会
- 生島浩 (1993) 非行少年への対応と援助、金剛出版
- 同 (1998) 非行臨床における心理的援助の方法、非行臨床の実践 28-42p、金剛出
版
- 同 (1999) 悩みを抱えられない少年たち、日本評論社
- 同 (2003) 非行臨床の焦点、金剛出版
- 鷹村アヤ子 (1989) 家族画の形式分析について、家族画ガイドブック 304-312p、矯正
協会
- 高橋依子 (1986) 描画テストの実施法、臨床描画研究 1 130-138p、家族画研究会
- 田中宏 (1989) 少年鑑別所における家族画の活用、家族画ガイドブック 114-143p、矯

正協会

- 宇都宮敦浩（2002）動的家族画（KFD）、家族描画法ハンドブック 72-91p、矯正協会
- 米倉五郎（1995）心理アセスメントとは、臨床心理学への招待 56-65p、ミネルヴァ書房

別添付資料 論文1～10

別添付論文 1～10

- 添付論文1：「非行少年の家族認知の分析 ―質問紙法及び描画法による類型化とその臨床像の検討」（1990）、矯正研修所紀要5号 83-89 p、法務省矯正研修所
- 添付論文2：「描画臨床における相互作用性と治療」（2002）、家族描画法ハンドブック 298-324 p、矯正協会
- 添付論文3：「非行臨床における家族画の活用」（2001）、臨床精神医学増刊号 165-169 p、アークメディア
- 添付論文4：「家族画における介入的アプローチ ―1枚の家族画を前にして次に何をするのか」（1995）、臨床描画研究10号 86-103 p、日本描画テスト描画療法学会
- 添付論文5：「非行少年の家族関係をめぐって ―ソンディ法と描画法による取り組み」（1990）、現代のエスプリ273号 194-201 p、至文堂
- 添付論文6：「コラージュ法」（2002）、家族描画法ハンドブック 172-192 p、矯正協会
- 添付論文7：「タイ王国少年院在院者の家族認知について ―家族画による類型化とその臨床像の検討」（1992）、中央研究所紀要第2号 23-45 p、矯正協会中央研究所
- 添付論文8：「大韓民国少年施設被収容者の家族画について」（1993）、中央研究所紀要第3号 99-112 p、矯正協会中央研究所
- 添付論文9：「描画テストの技術習得にまつわる初学者の態度について ―描画講義における質疑内容のパターン分析」（1996）、笠井達夫退官記念寄稿論文集 16-27 p
- 添付論文10：「描画解釈における着眼点のパターン分析」（1996）、臨床描画研究11号 122-139 p、日本描画テスト描画療法学会

藤掛 明